

第1回 動力ボートの効果的活用による救助技術の高度化に関する検討会

－ 議事概要 －

1. 日時：平成30年8月22日（水）13:30～15:30

2. 場所：東京八重洲ホール 901 会議室

3. 出席者（敬称略）

委員： 安倍 淳、石川 仁憲、森（代理）、榎本 雄太、菊地 太、河野 順、小林 恭一、
田辺 晃、東城 英雄、山岡 宏、吉村 高寛、五十嵐 潤一、稲継 丈大、
岡本 拓司、川勝 隆、篠原 秀和、東谷 浩二、牧野 英二

オブザーバー： 伊藤（代理）、島田 敬祐、明田 大吾

4. 議事内容

(1) あいさつ

・消防庁国民保護・防災部長よりあいさつ

(2) 委員紹介

(3) 座長選出

・座長に東京理科大学総合研究院教授 小林恭一氏を選任

(4) 議題

①検討会の目的等（資料3）

・事務局から「資料3」に基づき、本検討会の目的、主な検討事項、検討方法、検討スケジュールなどについて説明

【質疑・意見】

（座長） 昨年は浸水区域が対象だったが、今度は浸水区域に限らず議論をしていくのか。

（事務局） そういう認識である。ただし検討を進めるうえで、省いていくこともありうる。

②動力ボートを使用した水難救助体制状況調査について（資料4）

・事務局から、「資料4」に基づき、消防本部における「動力ボートを使用した水難救助体制状況調査」として、運用体制整備状況、マニュアル整備状況、訓練等実施状況について調査結果を報告

・上記調査結果を基に、事務局において事例調査を踏まえた課題について説明

【質疑・意見】

・ゴムボートのフロア素材について

（委員） これはデッキのことなのか。それともハルのことなのか。

（事務局） デッキのことである。

・操船資格者について

（委員） 資格者数が29,717の数字だが、その対象の母数を教えてもらいたい。また、ボートレスキューを専従でやっている隊員はいるのか。

（事務局） 日本の消防職員の165,000人の内の数字である。感覚的に多いか少ないかはわからない。また、専門的にそれだけをやっているところは事務局の知る限りない。

(委員) 資格者が1本部あたり45人という数字は決して少なくないと思う。専従チームが作れるならば十分な人数ではないか。

(事務局) 消防本部の勤務体制として、基本的に24時間シフト勤務体制のため、45人が1日出勤している状態は作り出せないのが状況である。

・操船・救出技術の不足について

(委員) 平水に海域が含まれているが、波があるコンディションでも平水という考えなのか。それとも、そもそも波のあるコンディションは想定していないのか。

(事務局) 海でも波があっても通常の状態であれば平水としている。現状は、すべての環境を想定している。

③消防本部の現状について(資料5)

・事務局から「資料5」に基づき、消防の実態として、出勤及び出向状況、事故種別救助活動件数の状況、消防所の1日の流れを説明

・消防本部より出席している委員から現状を説明

【質疑・意見】

(座長) 水難救助の位置づけや訓練実施状況など、悩みとかあるなら消防職員の方に聞いてみたい。

(委員) 「災害時」「浸水区域」「海・河川」など、もっとターゲットを区分けしてジャンルを絞ったほうがいいかもしれない。

(委員) 現状の勤務体制であると、水難訓練をするのは難しいのが現状である。

(委員) 現場を見ると1世代前の資機材を使っていたり、訓練では経験していない災害が起きたりしている。それが消防隊員のストレスにもなっており、そのために共通のフォーマットやマインドを作るべきではないか。

(委員) 水難事故や風水害が思ったより多い。そして救出する側が亡くなることが多い。出勤件数と実際の消防士が抱えているリスクは比較できないのではないか。

(委員) エンジンがかからない状況や船外機のメンテナンスを理解していないことがあった。訓練も大切だが、マニュアルなどを整備して全国に発信していくことや今あるものをもっと有効活用していけるようにすべきではないか。

(委員) 責任を明確化すること。船長が全体の責任を取るといような指揮系統を作るといいのではないか。

(座長) 動力ボートはあるが、通常のサイクルとしては使いづらい。メンテナンスやマニュアルの作成など、今やっていないことをやっていくことに意義があるのでではないか。

④主な検討事項(資料6)

・事務局から、「資料6」に基づき、主な検討事項として1～10項目を説明

・現状の1案として示したものであり、消防機関の実情に沿って検討していく

【質疑・意見】

(委員) 救助手法における要救助者の意識ありなしについて、具体的な内容も盛り込んでいくのか。

- (事務局) 今後委員の方々と検討していく。
- (委員) ポンプ隊と水難救助隊の出動時にタイムラグがあるが、ポンプ隊も使用できるゴムボートという拡大解釈をしてもよいか。
- (事務局) 救助隊、救急隊、ポンプ隊など色々な隊はあるが、一律的にやれるところがあるならやってもらうかたちになる。
- (委員) 救助だけでなく陸上隊などに引き継ぐというところもお願いしたい。
- (事務局) 重要な視点であり、整備していく必要があると考える。
- (委員) 行方不明者を捜索する際に、波を受けて転覆するという事故を起こした例がある。そういった事例を理解することが、安全運航の参考にもなる。
- (事務局) 活用できるものは活用していきたいと考えている。
- (委員) 安全運航の教員をやっている立場として、小型船舶で培ってきた知識や経験を加味したマニュアル作りをしてもらいたい。言葉の定義づけなど、小型船舶をトータルに見据えたマニュアル作りをお願いしたい。
- (委員) 小型船の事故で最も多いのは運航不能。メンテナンスを重視してほしい。トラブルが起きた場合に自分で復旧する能力も必要。そのためには、やはり専従体制を作ることも検討するべきではないか。
- (座長) ボートを年に2回しか点検していないところもあるなど、ただ置いてあるだけのところが多い。ただし最低限やらなければならないことはたくさんあり、その最低限なものとは高度なものを工夫して分けておくといいのではないか。

5. その他

(1) 動力ボートを活用した奏功事例及びヒヤリハット事例調査 (資料7)

- ・事務局から「資料7」に基づき、奏功事例とヒヤリハット事例を説明
- ー質疑・意見なしー

(2) その他

- ・事務局から次回の検討会日程について連絡

6. その他意見

- (委員) 過去にクルーが落水して大腿部を切断した事例があり、隊員の命を守る意味でもプロペラガードは必要である。
- (委員) 免許取得というものが小型船舶を操縦できるという前提になっていることを危惧している。年に1, 2回の訓練しか行われていない現状のなかで救助活動を行うことは、救助以前に自分の身を傷つけてしまう。資機材だけでなく、訓練も盛り込んでほしい。
- (委員) いかに隊員を守ることができるのかという視点を持ち、全て網羅するようなチェックリストが必要である。

以上